ライン地方のあるギムナジウム
（2）

小　峰　総 一 郎

目　　次

序――カーレきょうだい
1．1930年代の上構学校
（1）指導者――校長
（2）教員団
2．上構学校の授業と教育――宗教，民族主義，ナチズム
（1）ヴィルヘルム・カーレ
（2）マリア・カーレ

クラス風景（ハンマーシュミット（哲学・ドイツ語），1930年代）

ベルリンでの「民族政治科実習」で，1934年秋
（写真： いずれもブラハト氏提供）

序――カーレきょうだい

当時この地方に名前を知られたきょうだい（姉弟）がいた。

姉マリア・カーレは女性作家。娘時代をブラジルで過ごし，ドイツの第一次世界大戦敗北をこの地で知る。南米で愛国主義講演を展開し，詩人デビュー。ドイツに戻ってからは，ライン地方の郷土と民衆をたたえる詩作を行うと共に，失地東方ドイツ人の救援活動に従事した。後年彼女は，インターネットの Web 辞書「Wikipedia（ドイツ語版）」に，大要次のように紹介されている。

マリア・カーレ（Maria Kahle, 1891–1975）

●ドイツの女性作家。
●鉄道官吏の娘。1913－19 ブラジルの親戚宅で生活（1913-1924[1]）。当地で愛国的在外ドイツ主義を知り，これに傾倒。
・ドイツの大戦敗北後，南米でドイツの立場を宣伝講演。当地で第一詩集を出版。
・1920年代初頭に帰国，作家へ。**「后1918年東部割譲諸州困窮ドイツ人支援東方協会」**（Die Ostmarkhilfe für notleidende Deutschen in den nach 1918 geteilten Ostprovinzen）設立，支援活動を行う。
・貧困層を知るため，長く工場労働。それらの知見を報告，詩集に綴る。
・多くの民族志向の作品――ウェストファーレン地方の生活を賛美――を著す。
・解放後（戦後），厳しい追放に遭う。作品は発禁処分。
・後年，児童青少年文学編集者として新たな成功を収める。
（ドイツ Wikipedia，写真も[2]）

Maria Kahle（1891–1975）

これに対して，弟ヴィルヘルム・カーレはカトリックの司祭・教員であった。中等学校で司祭・教員（宗教，ドイツ語）として働く。1929年にリューテン上構学校に着任するも，姉のマリアがドイツ民族主義，ナチズムの道を突き進むのに対して，ヴィルヘルムの方は，ときにカトリック主義の立場から，ときに郷土主義の立場から，ナチズムとは一定の距離をもっていた（ナチ党に入党するも，のち離党）。その横顔は次のごとくである[3]。

ヴィルヘルム・カーレ（Wilhelm Kahle, 1893- ?）

●カトリック司祭，ギムナジウム司祭・教員（宗教，ドイツ語，［ラテン語］）
・1893――Wulfen（Westfalen）に生れる；1914――Abitur（Brilon にて）。
ミュンスター大学で学びドイツ語，ラテン語，歴史の国家試験合格（秀）
◎司祭
1918――Ph. D. 取得（パウロ研究）；　1922まで神学研究
1922――司祭叙任；　1924――カトリック中央党離党
1925――教職合格（優）；　1929までリチウム（女学校）で教える
◎司祭・教員
1929――Rüthen 上構学校着任。11. 5カトリック宗教科補充試験合格（良）
1930. 5. 1 ――学校ミサ開始（週２回）
1933. 4 ――ナチ党入党　　-. 5 ――ナチ教員連盟加入
1934夏 ――ナチズム講演　　-. 8. 31 ――ナチ党離党
1936. 4. 1 ―― アルンスベルクのギムナジウムへ転任（ドイツ語，歴史）
1940 ―― ドイツ語授業禁止（「聖職につき不適格」）；1944 ― 歴史授業も禁止
（Bracht, S. 379-386）

Wilhelm Kahle（1893-？）
（出所：ブラハト氏写真より）

1　Maria Kahle（ドイツ国会図書館電子カタログ）https://portal.dnb.de/opac.htm?method=showFullRecord&currentResultId=Maria+and+Kahle%26any&currentPosition=92　最終閲覧2014年12月25日
2　Wikipedia（ドイツ語版）http://de.metapedia.org/wiki/Kahle,_Maria。最終閲覧2014年８月19日
3　Bracht, S. 379-386 に基づき筆者作成。

これら二人のカーレは，1930年代のリューテン上構学校と深く関わることになる。それはリューテン上構学校が完成し・第１回アビトゥーア生を輩出する時期（1931/32），および，ナチ党（国家社会主義ドイツ労働者党 : Nationalsozialistische Deutsche Arbeiterpartei: NSDAP）の政権掌握（1933年１月30日）と教育支配，ナチズムカリキュラムの施行時期と重なる。ではその関わりとは，どのようなものであったのか。上構学校は，ナチ世界観を忠実に再現する装置であったのか，あるいはまた，カトリック神学に拠りながらナチズムに抵抗（ないし不服従）する拠点たりえたのだろうか。そのことを，これからリューテン上構学校の教育内実を見ながら検討したいと思う。

１．1930年代の上構学校

前回の研究ノートで，①代校長**シュニーダーテューンス**（Philipp Schniedertüns: 1926-1930= 4年間在任），②代校長**フルック**（Dr. Hans Fluck: 1930-1932= 2年間在任）に触れた。そこでまず，その次の　③代校長**シュタインリュッケ**（Heinrich Steinrücke: 1932-1945=13年間在職）を紹介することから始めよう。

（１）指導者――校長

● Rüthen 師範・ミュンスター大卒の教育官僚［――タイトル小峰。以下同じ］

シュタインリュッケは1931/32の上構学校完成後，13年の長きにわたって校長であり続けた。彼は，「民主主義」から「ナチズム」への「移行」を果たしたに留まらず，1940年代にはナチス教育学をここリューテン上構学校で確立した人物である。

シュタインリュッケ校長（③代校長，1932-1945在任，13年間）	
シュタインリュッケは1884年ヴァルシュタイン生。ここの国民学校，町立中等学校を出て1899－1904年，当時のリューテン師範学校（教員ゼミナール）で学び教職に就いた。国民学校で４年間，そしてリューテン師範学校で11年間教育に携わる。中間学校教員資格取得（1913）後，ミュンスター大学中等教員コースに入学（1919）。ドイツ語，哲学入門，宗教を専攻して（1923），1926学位。論文は反カトリック・反教会詩人フリードリヒ・シュタインコンに関するもの。 その後1926/27 P. S. K.（州学務委員会 =Provinzial Schulkollegium）に勤務。Büren の上構学校（1931一級教員）を経て，〔1932年〕，完成した Rüthen 上構学校校長へ。視学 Hellwig は彼に，「民族性の奥深くに入りこむ」よう期待。Rüthen は田舎であるばかりでなく，民族的に「特別の本性をもつ」と，彼に上構学校の使命達成を期待したのだった・・・[4]。	 シュタインリュッケ校長 （在職1932-1945） （2005. 6 同校掲示板より筆者接写）

4　Vgl.　Bracht, S. 371-372.

じつに，シュタインリュッケは教育畑を粛々と歩み続けて管理職にまで上り詰めた，教育界の成功者と言うことができよう。少なくとも前任者のフルック校長のように，町民に芸術を振興したり，大地のカトリック主義の立場からナチズムに不服従を示すといった行動を，彼に期待することはできない。

はじめナチスに距離をもっていたというが，シュタインリュッケは消極的なカトリック中央党員であり，1933年のナチ党独裁後は急速にナチズムに「接近」したのである。

校長の人物像

1933. 5. 1ナチ党へ集団入党。のちの［戦後の］非ナチ化調書では，「入党は期限の1933. 5. 1を越える見通しだったが，ナチ党地区責任者が校長職剥奪をちらつかせ，入党を早めたものである」，「［自分は］ナチ党の本質をよく知らなかった」，「ブロック長への就任提案も断った。アーリア証はない。ナチ制服も着なかった」と言っている。しかし1938. 7にはナチ教員連盟支部長に就いている。1938年には，新任三級教員との面談で，一女生徒のナチ思想評定に関し，彼女がヒトラーユーゲント内で校長攻撃を始めたとして彼女への「良」評定案を拒否，彼［三級教員］に対して「スパイ活動」の嫌疑をかけている。

一方，1939年，ナチ党郡責任者は校長をとがめた。それは

①聖体祝日に学校を閉校して参加　②学校ミサを促進した　③不穏思想放任，のゆえであった[5]。

宗教授業停止，学校のナチ化

校長はナチ党に近い団体の文化行事を展開した。ヴィルヘルム・シェーファー[6]の『10月18日』上演や，ナチ民生局に好都合のコンサート実施（Büren 音楽連盟による）であった。…こうして1935年には学校の態勢，就中教育内容がナチ適合化した。1939年には宗教の教員 Dr. Weisenfeld が転任，宗教の実施は不可能となった。

その後1942年に宗教停止（教師不足）――宗教のための国民学校教師任用よりも先に停止措置をとった。聖職者教頭 Eisenhut が，時間割通り宗教をやりたいとの申し出も却下した。

1943年に宗教再開。Theodor Rüther を Brilon より雇う。1944. 7. 31まで。1939年に一教員が宗教旗を掲げて苦境に立ったとき，校長は，彼のナチ的行動に欠陥があると公言し，彼を殆んど庇わなかったのである[7]。

シュタインリュッケは，主観的には「誠実なカトリック」たろうとしたようである（教員シュルテの言）。だが，「ナチズムに消極的」との父母の抗議には弁明を展開し，ナチ行事に学校を休校して配慮，また，生徒にナチ組織化を促したのだった。本人はナチに「内心反発」していたと言うが，ナチ党当局は，シュタインリュッケを「平和的である」とか「ナチプログラムに反対す

5　A. a. O., S. 373-374.

6　ヴィルヘルム・シェーファー（Wilhelm Schäfer, 1868 – 1952）：作家。風土と歴史を結合して，国民の精神的基盤付与に努力した。（『岩波西洋人名辞典』2013，参照）

7　Vgl. Bracht, S. 376-378.

るカトリック精神」ではないと見ていた。このシュタインリュッケは，戦後1948年の「非ナチ化」（ナチ党関係者の人事粛清）で，ナチ党との関係強固な人物である「カテゴリーV」に分類され，免職に処せられたのだった[8]。

（2）教員団

ドイツ，プロイセンの教育が中央集権的であることはあまねく知られている。教育は，軍事と並び国家存立の最重要要件と考えられ，「臣民」教育の理念と，それを実現する上意下達のシステマチックな教育行政は，18世紀のこの国（邦）成立以来のものだった[9]。その後1918年，革命によって成立したワイマール共和国は，イデオロギー的には多元主義であったが，1933年，ナチス「第三帝国」はこれを否定して「総統」（Führer）とナチ党に権力を集中した（=Gleichschaltung: 画一化）。ナチス政権は，ナチ党独裁のもと，「学校教育」による「教育」を否定，〈教育〉を全社会機能化した。このナチズム・ナチス教育学に，教育における多元主義を見出すことは一般的には困難である[10]。だが，そこに僅かながら多元主義（複数主義）の可能性を見出すとするならば，思想的には教会である。しかし，やがてカトリック中央党は解散，ナチス政権とヴァチカン教皇庁との間で「政教協約」（Reichskonkordat コンコルダート , 1933. 7. 20）が締結され，カトリック教会はナチス政権に沈黙したのだった。1939年３月２日，条約締結当時のヴァチカン教皇庁・国務長官エウジェニオ･バチェリが教皇に選出され，このドイツ贔屓の教皇ピウス12世（〈ヒトラーの教皇〉と言われた）のもとで，教会はナチスの侵略戦争，ユダヤ人迫害に沈黙したのである[11]。

しかし，ここライン地方の敬虔な宗教風土[12]は，即座にナチス体制を受け入れたのではなかった。それはいくつかの段階を踏み，除々にナチス教学体制を確立するのである。いまそれを教員団の構成と絡めて述べることにしよう。

教員団構成――1920年代，1930年代

リューテン上構学校は男女共学である。設立構想時に，司教総代理は，男女が一緒だと平安を乱すと男女共学に反対。これに対し，教員ゼミナールの聖職者教頭アイゼンフートは，社会参加のカトリックが男女の危機を恐れてはこの地に指導者が育たないと反論したのだった。結局アイ

8　A. a. O., S. 376.

9　梅根悟『近代国家と民衆教育――プロイセン民衆教育政策史――』誠文堂新光社，1967，参照。

10　Vgl. Harald Scholtz: Erziehung und Unterricht unterm Hakenkreuz. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1985.（Kleine Vandenhoeck-Reihe, 1512）

11　大澤武男『ローマ教皇とナチス』文藝春秋 , 2004（文春新書 , 364），参照。

12　リューテンを訪れて後，筆者はこの地方で，カトリック教会の司祭叙階式を見学することができた。教会に生きるひと，信仰を拠り所として生きる人々を間近にし，感動を禁じ得なかった。

ゼンフートの理性的主張と，生徒獲得という実際的要請との結果，上構学校は男女共学で出発することになったのである[13]。

これら男女合わせて約100名，［最上級］OI（オーベル・プリマ）から［最下級］UIII（ウンター・テルティア）まで６クラスの青少年生徒に対し，教員は約10名であった。

> 今日の日本の学校事情から考えると，その規模は大変小さいように思える。６学年100名生徒に教員10名というと，「村の小学校」といったところである。ドイツのギムナジウムは，戦前日本の旧制高等学校・中等学校相当であるから，これと比べても生徒・教員数は少ない。しかし以下に述べるように，リューテン上構学校で，一級教員・二級教員の多くは学位をもつ学問的専門職である。そのため，規模は小さくとも，上構学校は，地域の学術の府だったのである。

そのような学校を地元のカトリック住民は親しく受け止めた。ヴィルヘルム・カーレは学校に着任した際，10人ほどの老婦人にカトリックの司式を執り行い，また第２代校長フルックは，住民に対しピアノ演奏会や音楽会を催した。「学校」と人々とは近しかったと言える。しかしその「近さ」ゆえに，ナチズムの攻勢にも晒されやすかった（やがてこれと関わって，１女生徒のアビトゥーア不合格取消事件なるものも出来している〈1933年〉）。学校は父母住民，町，教会当局から隔絶した「学の殿堂」ではなかったのである。

いま，上構学校出発時1920年代の教員団と，1930年代の教員団を整理すると，次のようになる。

表１-1　教員団（1926-1930）

教員＼年	1926	1927	1928	1929	1930
一級教員 (St. R.)	（校長） Schniedertüns（留任） Harren	S. –	S. Verhoeven Tesch	S. V. T.	- V. T.
二級教員 (Stud. -Ass.)		/（後）Flören Beckermann	F. Beckermann（前）/ Pott（前）/	F. Kahle Kohorst	F. Ka. –
他の講師	Gerning Rosemann	Gerning（前）/ R.	R. Wings Henneböle Kauke	R. W. H. K.	

（Bracht, S. 294-295を基に小峰作成）

教員の新規採用はごく限定的であった。ミュンスターの P.S.K.（州学務委員会）は，プロイセン文部省に教員の専門領域の分割を提起し，その後もこれを推し広げた。これにより，教員は多科目担当が可能となり，教員採用が抑制されたのである。これは１名で複数科目の担当が可能と

13　Vgl. Bracht, S. 284-285. 男女共学は意義が大きかった。女子の退学は少なく，ある年度に大学進学したプリマ生の女生徒は，３人中２人が「博士」となっていた（S. 367）。

なる，まことに効率的な学校運営方策であった。

1926年（開学の年）に，教員ゼミナールから上構学校への留任は，校長を別とすれば一級教員 St. R. Dr. Harren のみ。他は欠格だった。そこで P.S.K. は他の人員の「補助」を要請した。その結果 Dr. Gerning（教員養成所教員）が上構学校職務担当となる。また Rosemann（国民学校古参教員）が，音楽，図画の時間講師となっている。その後1927年に Gerning が異動，形式要件を満たす二級教員（Stud. -Ass.）の Flören が着任。1927年より Harren に代り，二級教員 Beckermann。これで教員団は師範学校時代と完全に入れ替わった。1928年には，一級教員 Verhoeven と一級教員 Tesch が入り，時間講師に国民学校長 Wings と国民学校教員 Henneböle，Kauke。1929/30年には，二級教員 Dr. Kahle と二級教員 Kohorst 加入。かくして，このとき68名生徒から成る上構学校は，6学術教師，そして講師の国民学校教員ら，という体制となった。1930年には Kohorst，Schniedertüns が学校を去っている[14]。

このように，1920年代のリューテン上構学校では教員の入れ替えが頻繁だった。それは学術化のためではあったが，授業と教育，ならびに町への信頼にとってはマイナスであった。かつての師範学校との人的伝統も切れてしまったのである。

表1-2　教員団（1930-1932）

教員＼年	1930年	1931年		1932年
		（前半）	（後半）	
一級教員 （St. R.）	Fluck，Flören Verhoeven，Tesch	Fluck, Tesch, Hesse	Fluck, T, H	Steinrücke, T, H
二級教員 （Stud. -Ass.）	Kahle，Rath, Zöllner	K，R, Z，Hagemann，Lücke	K，－ Z，H,	K，－ －，Steinwachs, α
講師ほか	Wings，Kauke Helle	W，K H	R，W, K	W，K Hoischen
合計	10	8＋（3？）＝11	6＋（3？）＝9	9？

（Bracht, S. 317-319を基に小峰作成）

1930年代になると上構学校は更に新たな困難に遭遇する。世界恐慌とドイツの経済危機，これに伴うプロイセンの人員削減策である。ブリューニング内閣は，節減政策によるクラス規模増と，時間数削減，教員給与の80％縮減を行ったが，これは教員に多大な負担を強いるものだった[15]。

1930年，リューテン校は二級教員 Rath と Zöllner を雇用して一級教員4人（Fluck，Flören,

14　Vgl. Bracht, S. 294-295.

15　**第二次プロイセン緊縮令（1931. 12）**の結果，63歳以上の教員はすべて退職させられた。また，教員の義務時間を週24時間から25時間に引き上げ，他方生徒の受ける授業時間数を最大週30時間にまで引き下げることにより，中等学校1校あたりほぼ1名の教員減が実現した。R. ベリング（望田幸男・対馬達雄・黒田多美子訳）『歴史のなかの教師たち：ドイツ教員社会史』ミネルヴァ書房，1987，136-137ページ。

Verhoeven，Tesch），二級教員３人（Kahle，Rath，Zöllner），講師 Wings（週12時間，図画），国民学校教師 Kauke（４時間，音楽），女助手 Helle（４時間，女子体操）の合計10名の体制を確立。その後プロイセンの教員削減により Rath は19時間担当の講師へ。これにより，他の全教師の授業時数を切下げることができた。1932. 4. 1, Zöllner 異動。代りに Dr. Steinwachs。予定されていたカーレの異動は，退役町長 Müller（父母会長）の介入で棚上げとなった。Müller は聖職者教員の空白を防ぐべく，大司教事務局に対して直訴した。その根拠は，プロイセン省令の謂う「最良の，最も経験ある，試され済みの教員を選べ」との規定（1925. 2. 6）であった。その結果，カーレは OI の宗教，ドイツ語，ラテン語担当として本校に留まることとなった。ヴィルヘルム・カーレに対する地元の支持が厚かったことがうかがえる[16]。

２．上構学校の授業と教育――宗教，民族主義，ナチズム

いま，ヴィルヘルム・カーレに触れた。そこで，このカーレきょうだいにおける宗教と民族主義，ナチズムとの関連を検討してみたい。

（１）ヴィルヘルム・カーレ（Wilhelm Kahle, 1893- ?）

ヴィルヘルム・カーレは1929年に教員［二級教員（Stud. -Ass.）］・司祭としてリューテン上構学校に着任した（宗教，ドイツ語）。リューテン着任以前に５年間教職（リチウム＝女学校）にあったが，彼は，教員と聖職者との二足の草鞋（わらじ）は不満だったようである（教員より以前にパウロ研究で学位。その後司祭叙任。）しかし彼は，ギムナジウムの一級教員ではなく，二級教員である。そこで当時の校長フルックは，「学校ミサ」を開始し（週２回），身分の不安定なカーレを，宗教の授業と合わせ宗教関連での一本化をはかった（ただし，「学校ミサ」は，教会から典礼上の問題を指摘された）。カーレは，1932年までは反ナチズムであったという。

それが，ナチ党が政権を獲得するや（1933年１月30日ヒトラー内閣成立），同年４月末，他の同僚とナチ党入党。5. 1　ナチ教員連盟加盟，そして講演「ドイツ的とは何か」をナチ党地区長前で数回，のみならず1933年夏には管区弁士としてドルトムント，ヴェンネ・アイケルで行なっている。1934. 3. 10　NSV（ナチ民生局）に入局し民生長となる。活発なナチ党教員の姿である[17]。

ところが1934. 8. 31，ナチ党入党届を撤回（＝離党）。その理由は，①政教協約（1933. 7. 20）に基き，司教総代理が彼のナチ活動に不同意を示したこと　②事情に通じた党員から，党は聖職者の政治組織内活動を望んでいないとの指摘を受けたこと，によるものだった。だが，カーレは

16　以上 Bracht, S. 317-319.
17　Vgl. Bracht, S. 379-381.

「心はナチスと離れていない」旨を述べ，ナチ婦人集会で講演。作文テーマも，彼のクラスがHJ（ヒトラー・ユーゲント），SA（ナチ突撃隊）にしっかり所属していることを示していたという。

これらを見ると，カーレのナチズム運動は時代への迎合，「保身」ではないかとの疑念も生じてくる（カーレは当時40歳。一級教員の道を探るも，未だ叶えられてはいない）。

しかし，カーレの歴史意識は，ナチズムよりもむしろカトリック主義に発していると言ってよい。彼は三級教員論文で，シュプランガーの『青年の心理』を扱い，この中で現実の社会問題を取り上げた。そこではカトリック青年の理想主義を擁護，彼らの青年運動に親近感を示している。ワイマール共和国は「機械的」であるとしてこれを忌避，対してカトリック青年運動は，共同体体験により青年の自己教育を促し，これがひいてはローマの典礼を復権すると考えた。青年運動は「民族性の精神的・身体的地盤の新生」（ein neues Werden der geistigen und körperlichen Grundlagen des Volkstums）である，と[18]。カーレは，「信仰と教会，キリストの秘蹟に身を委ねる」（Hingabe an Glaube und Kirche, an das Mysterium Christi）キリスト中心主義（Christozentrismus）を，旧約聖書から導くのである。聖書と典礼への回帰，科学と敬虔の調和，カトリック復古要求を掲げるカーレの歴史意識は，民族的，軍事的，反セム主義のみならず，想像上の前線兵士の精神，「民族主義的キリスト教信仰」（das völkische Christentum）と言える（1914年以前への回帰）。この地点においてカーレはナチズム運動と接点を有し，アメリカ，ボルシェヴィズム，ユダヤ主義に対抗する協同精神（Der Gemeinschaftsgeist）に期待するのだが，ナチスの反教会運動は受け入れ難かった。

そのようなカーレが理想とするのが**ゲオルゲ**（Stefan Anton George, 1868 - 1933）だった[19]。ライン地方に生まれ，古ゲルマンの慣行，ゲルマンの特性を歌い上げた放浪の詩人・ゲオルゲは，ゲルマン主義とキリスト教の宗教的倫理的結合者だった。のちに，アドルフ・ヒトラー暗殺計画の首謀者となったクラウス・フォン・シュタウフェンベルク伯爵もゲオルゲに傾倒していたというが，カーレはこのゲオルゲの中に，ドイツ精神の固有性とドイツの新しい希望を見出したのだった。

カーレは，一級教員昇任後３月の1936年４月，アルンスベルクのギムナジウムへ転出。８月，常雇いとなった。1937年，カーレは在外ドイツ人協会（VDA），帝国植民地同盟（Reichskolonialbund）に加わっている[20]。

叙上から，リューテン上構学校における二級教員ヴィルヘルム・カーレの人物像は次のようになるであろう。カトリックの信仰心強固な土壌ヴルフェンに生まれ育ったカーレは，自他共に認

18　A. a. O., S. 387.

19　**シュテファン・ゲオルゲ**（Stefan Anton George, 1868 - 1933）――ドイツの詩人。ライン河畔ビューデスハイム生。古典的古代，中世ドイツに作品世界を広げて唯物的近代世界を批判，新時代を予言する象徴詩は，ナチスが政治利用するところとなった。（『岩波西洋人名辞典』2013，参照）

20　A. a. O., S. 384.

める敬虔なキリスト教信仰者だった。それが，1933年のナチズム革命は彼の教会・宗教観を制約し，二級教員というギムナジウム教員としては不安定な状況もあり，彼のナチズムへの「接近」を加速させたのである，と。カーレの友愛的，静的な態度は生徒の回想するところであった。また，担当するドイツ語では，当校の文書館に残された資料（扱った教材，作文テーマ，アビトゥーア作品）から見るとき，カトリック司祭的ではあるものの，教科の相互乗り入れ（教科合同）を見通し，問題解決的で，生徒の可能性を尊重するものであることがうかがえる。例えば，1931/32年の「ドイツ語」教育内容は，次のようになっていた[21]。

カーレの教材（1931/32）

UI 級のドイツ語――ドイツ・ルネサンス詩，バロック詩，啓蒙期の詩，ロココの詩，ヴィーラント，レッシンク，ヘルダー，ゲーテ，シラーらの諸作品。

生徒の読書リスト――ミュラー・ラストシュタット，グリンメルスハウゼン，v. ホフマンスタール，カロッサ，Th. マン，などのもの。

作文テーマ

第一課題：クラス作文（テーマ選択，その他）

c）現代技術は我々を幸福にしたか？

d）動物が君を見ている

e）この50年間のヨーロッパの景観

第二課題：クラス作文（テーマ選択，その他）

a）地上と霊への神の軌跡

b）体育は性格形成にいかなる意義をもつか

第三課題：宿題（テーマ選択，その他）

a）我国の民族祝典――それは何か，どうあるべきか

e）私はどんな演説者となるか？

第四課題：クラス作文（テーマ選択，その他）

a）ドイツの風景，ドイツ史の一情景

b）悲劇的葛藤の展開と解決を自身の発見から述べよ

c）現代若者の運命

d）現代危機からの脱出を私はこう考える

第五課題：クラス作文（テーマ選択，その他）

a）生物って何と素晴しい！　しかし存在は苦しい！　これをどう取るか

b）君が驚き，なりたいと思う英雄像を述べよ

21　Bracht, S. 335-337.

第六課題：クラス作文（テーマ選択，その他）

a）自由？　だがしかし

b）教会による世界の聖化

d）共同体と私

第七課題：クラス作文（テーマ選択，その他）

b）一人の生徒，おてんば，地主，失業者，出版社長がコンサートに来て自分らの意見を述べる

d）文化施設と生存問題につき自分の考え
（テーマ枠，例えば，教会，国家，学校，民族）

第八課題：クラス作文（テーマ選択，その他）

c）18世紀と現代の人間類型

d）若きゲーテと自分は似ていると思うか？

これらはいずれもキリスト教的，文化史的な内容である。ここにカーレの歴史意義が反映されていた。民主主義的という訳ではないが，それらはナチズム席巻以前のカーレの思想世界を表していたということができるのである。

（2）マリア・カーレ（Maria Kahle, 1891–1975）

次に，マリア・カーレと上構学校との関係を問うことにする。

学校では，生徒劇に於て，素朴な農民らしい敬虔さから真の人生に至るという主題の劇が上演された（1932. 3. 6）。それはカトリックの思想表現の一つであった。これの布石となったのが，郷土の女性文筆家マリア・カーレを招いての講演会である（1931年12月）。マリアは上構学校二級教員ヴィルヘルム・カーレの姉で，当時，ブラジル帰りの女流詩人として民族主義運動を精力的

22 『仮面を脱いだ著名人』新版，2001年には，ドイツ帰国後のマリア・カーレについてこう述べられている。――1919年［ママ］にドイツに帰国後，彼女は，著述家ならびに青年運動団体「青年ドイツ同盟」（Jungdeutschlandbund）活動家として行動する。「后1918年帝国東部割譲諸州困窮ドイツ人支援東方協会」を共同設立。貧困国民層をより良く知るため工場労働者となった。その知見を報告『出来高払い女性労働者』（1930），詩集『プロレタリア女性』（1931）に著す。人民に誠実で祖国的色調の沢山の作品が，彼女のペンから生み出された；例えば「世界の中のドイツ文化」（1929），「ドイツ婦人とドイツ民族」（1934），「国境の彼方のドイツの故郷」（1934），である。彼女がとりわけ愛したのはヴェストファーレン地方，中でも，自分の祖先が生まれたザウアーラントであった。彼女はルール地方のオルスブルクに住んだ。ウェストファーレンの土地と人々に対して彼女は，詩集「ルール地方」（1923），歴史物語「東国のウェストファーレン農民」（1940），叙事詩「ザウアーラントの故郷の山」（1941），また戦後出版されたウェストファーレン出のドイツ騎士団長ヴォルター・フォン・プレッテンベルクに関する作品を捧げている…，と。Prominente ohne Maske NEU – 1000 Lebensläufe einflussreicher Zeitgenossen, München: FZ Verlag, 2001, S. 311.

に展開していたのである[22]。

講演でマリアは，民族主義的（völkisch）・カトリック的・保守的（katholisch-konservativ）な作品世界を紹介した。そして，詩作を突き動かした動機がブラジル滞在中に目にした「外国ドイツ人」の苦悩にあることに及んだ。そして彼女は，このような苦境を脱するには国境の内外に強固なドイツ人の連帯を作り上げることが急務だと訴えたのである（大ドイツ思想）。「ドイツ人が共有する最深，最聖のものは，我らの心を結びつけるドイツの民族性である。ドイツ人の心にとって，ドイツ文化，ドイツ芸術は生命財であり，今日我が国に見られるものとは異なる，唯一の教育財なのである…」[23]と。

彼女は，ワイマールの民主主義・複数主義を断罪し，社会的目標として「ドイツ民族共同体」の建設を呼びかけた（文化ペシミズム・反自由主義）。第一次大戦後ドイツの旧東部・北部国境地帯に誕生した新国家ポーランド，バルト諸国の中に，本国と切り離された「ドイツ系少数者」として生活する「外国ドイツ人」を支援せよと熱情的に訴えたのだった。

彼女の属する「ヴェストファーレン郷土同盟（Westfälischer Heimatbund: WHB」は，ヴェルサィユ条約の定めた国境をみとめず，旧ドイツ帝国国境の回復を目標に掲げていた。旧ドイツ帝国の国境回復は，ナチズムの主張と重なる。

マリアを招くに当たっては「在外ドイツ人協会」（Verein für das Deutschtum im Ausland）の存在が大きかった[24]。当時上構学校の教員は，教員Ｈの指導下にほぼ全員が同協会に加盟，同校には協会の支部が置かれていた。プロイセン文部大臣ベリッツは，1927年に教則大綱を引用しながら，ドイツ国境外に暮らすドイツ人との「解消できぬ運命共同体」（unauflösliche Schicksalsgemeinschaft）という論稿を著した。これに倣ってシュタインリュッケ校長も，「我が外国同胞との結合の思想を生々と保持せよ」と学校誌に書いていた。郷土科は東方植民教材と結合した。マリアの弟，教員ヴィルヘルム・カーレは，授業でVDAを主題化し，UIクラス作文のテーマとした。マリアはその後，1935年２月，ワルター・フォン・プレッテンベルク祭で，生徒の東方植民詩を引きながら，ヴェストファーレン出身のリヴォニア騎士団長フォン・プレッテンベルクを讃えている[25]。

23　Vgl. Bracht, S. 358.

24　在外ドイツ人協会（Verein für das Deutschtum im Ausland）―― 全ドイツ学校協会（Der Allgemeine Deutsche Schulverein）の後身。なお，この時代のドイツ外相シュトレーゼマンと国際法学者ブルンスの外国ドイツ人支援については，小峰『ポーランドの中の《ドイツ人》――第一次世界大戦後ポーランドにおけるドイツ系少数者教育――』学文社，2014，ならびにSchot, Bastiaan: Nation oder Staat? : Deutschland und der Minderheitenschutz: zur Völkerbundspolitik der Stresemann-Ära. Marburg/Lahn : J. G. Herder-Institut, 1988，参照。

25　リヴォニア騎士団――ドイツ騎士団のリヴォニア地域（エストニア，リトアニア）にあった自治的な分団。ヴォルター・フォン・プレッテンベルク Wolter von Plettenberg（c. 1450 –1535）はリヴォニア騎士団長（在位1483-1494）。初期バルト・ドイツ人の最重要人物の一人である。（英，独 Wikipedia 参照。最終閲覧：2014. 8）ロシアから国を守り，リヴォニア修道会をプロイセンから解放。（『岩波人名辞典』）

マリアの講演は，極度に政治的な時局講演会であった。

マリアはまた，上構学校の「**民族政治科実習（Nationalpolitischer Lehrgang）**」にも深く関わっている。そもそも「民族政治科実習」とはいかなるものか。筆者の手元の「ナチズムと教育」関連文献では実態がよく分からなかったので[26]，インターネットで検索したところ，ケルン市の「ナチズムの中の学校」プロジェクト中のホームページ「青年！ドイツ1918-1945」が，これを次のように説明していた。

民族政治科実習（Nationalpolitischer Lehrgang）

●文相ルスト，「キャンプと隊列（Kolonne）とが，新しい教育様式だ」と確信。ドイツの学校制度は生徒にこれらを想定していなかったので，これが生徒をナチ精神で教育するための新しい様式として発見されることとなった。」

●「1933. 10. 4．文相はプロイセン中等学校に3週間までの「民族政治科実習」(Nationalpolitischer Lehrgang)の導入を命じた。これは，男子は年1回，女子は上級の間に1回だけ行うことが定められていた。全プリマ生は――1934年からはII年級生徒も――これのために，殆どが学校田園寮ないしユースホステルで行なわれる行事に参加しなくてはならなくなった。

●最初の民族政治科実習は，1933年12月には行われている[27]。

リューテン上構学校は，1934年秋に民族政治科実習をベルリンで実施した。このとき生徒は，ヒトラー・ユーゲントの制服を着て，ウンター・デン・リンデン行進にも参加しているようなのだが，興味深いのは，マリアもこの実習に参加していたことである[28]。マリアは，当校教学に深く関わっていたのである。

26　**民族政治科実習（Nationalpolitischer Lehrgang）**――ナチズム教育を扱った基本文献と思われる Heinemann, Manfred [et al.] (Hrsg.): Erziehung und Schulung im Dritten Reich. (Veröffentlichungen der Historischen Kommission der Deutschen Gesellschaft für Erziehungswissenschaft, Bd. 4)1. Aufl. T. 1/T. 2, Stuttgart: Klett-Cotta, 1980; Scholtz, Harald: Erziehung und Unterricht unterm Hakenkreuz. (Kleine Vandenhoeck-Reihe, 1512), Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1985; 平井正『ヒトラー・ユーゲント：青年運動から戦闘組織へ』中央公論新社，2001; 増渕幸男『ナチズムと教育：ナチス教育政策の原風景』東信堂，2004 などからは「民族政治科実習」の実態が浮かび上がって来なかった。

ただ，Dithmar, Reinhard (Hrsg.): Schule und Unterricht im Dritten Reich. Neuwied：Luchterhand, 1989 には，資料として，プロイセン文部大臣告知「中等学校活動における緊急改革（1933. 8）」が収められている（引用は Harald Scholtz）。そこには，野外実習（Wanderung）に関して大要次のように述べられていた。「野外実習は，学問的というよりは身体・人格・「民族意志陶冶」（nationale Willensbildung）に資するものなので，半年に1回は2-3日の実習を実施せよ。ナチ突撃隊・親衛隊・ヒトラー・ユーゲントおよびヒトラー少年団においては，青年の協同精神と＜民族政治活動（nationalpolitisches Streben）＞とがたいへん高度に統一されているので，特に数日間の野外実習の場合はこれらの団体と緊密に連携して実施しなければならない」と（Dithmar, S. 18.）。同年10月4日に定められたプロイセン文部省の「民族政治科実習（Nationalpolitischer Lehrgang）令」には，ほぼこれに近い内容が盛られたものと思われる。

27　ケルン市プロジェクト「ナチズムの中の学校」HP「青年よ！ドイツ1918-1945」 http://www.jugend1918-1945.de/thema.aspx?s=5102&m=965&open=5102（最終閲覧：2014年9 月）

28　1934年秋，ベルリンでの民族政治科実習写真。写真とその説明はブラハト氏書簡。

SA（ナチ突撃隊）食堂の前に立つマリア・カーレ （1934年秋，ベルリンでの民族政治科実習で）	ベルリン，ウンター・デン・リンデン通り （1934年秋，同左） （写真提供：ともにブラハト氏）

マリア・カーレの思想・言説は，上構学校の授業内容として取り入れられ，アビトゥーア試験にもそれが出題されていた。

1937年アビトゥーア試験（試験官：一級教員 Dr. Ferdinand Hammerschmidt，校長 Dr. Heinrich Steinrücke）

［この年度は，学制短縮に伴いアビトゥーアの大変更が行われた。ドイツ国文相ルストは，1936. 11. 30 学制短縮を告知。そのため翌1937年春のアビトゥーア試験は，通常の OI 生に加え，UI 生にも実施された。言うなれば「繰り上げ卒業試験」である。また，このときドイツ語アビトゥーア試験に筆記試験はなく，口頭試験のみであった。── 小峰］

UI アビトゥーア口述試験に出題された５つの問題のうち，マリアに関係するのは第二問「ドイツ現代の民族的な詩」であった。これに対し生徒たちは，マリア・カーレやシーラッハ[29]を引いて自身の考える処を述べた。同校『アビトゥーア記録』には次のように書かれていた。

「労働者詩の初期に民族共同体精神が発見された。この精神はドイツ国境を越える。マリア・カーレの詩にあるように，青年の詩は民族共同体理想に達そうとするものだ。それはシーラッハも述べるごとくである…」と[30]。

マリア・カーレは，ブラジル帰りの女性詩人として祖国とドイツ人，郷土と自然，共同体精神を謳い，外地ドイツ人（民族ドイツ人 Volksdeutsche）の支援と国境再編を目指す政治運動を展開してリューテン上構学校と関わった。だが，ナチスの権力掌握後，彼女の思想はナチス世界観に適合するものとして上構学校の授業と青年運動に裏付けを与え，それを鼓舞するものとなり，今まで以上に関係を強化したのである。生徒はそのようなマリアの思想を，ドイツ語学習で，また民族政治科実習やヒトラー･ユーゲント活動を通して「親しく」取り込んで行ったと言えるのである。

［この項終わり。以下次号］

29　バルドゥール・フォン・シーラッハ（Baldur Benedikt von Schirach, 1907 - 1974）──ナチ党の全国青少年指導者，ヒトラー・ユーゲント指導者。1933年，全国の青少年組織を「ヒトラー・ユーゲント」に一元化（1939年「ヒトラー・ユーゲント法」制定）した。（平井正『ヒトラー・ユーゲント』参照）

30　Vgl. Bracht, S. 529-530.

文　献

1. Bracht, Hans-Günther: Das höhere Schulwesen im Spannungsfeld von Demokratie und Nationalsozialismus: ein Beitrag zur Kontinuitätsdebatte am Beispiel der preußischen Aufbauschule. Bern: Peter Lang, 1998.
2. Dithmar, Reinhard (Hrsg.): Schule und Unterricht im Dritten Reich. Neuwied：Luchterhand, 1989.
3. Heinemann, Manfred [et al.] (Hrsg.): Erziehung und Schulung im Dritten Reich. (Veröffentlichungen der Historischen Kommission der Deutschen Gesellschaft für Erziehungswissenschaft, Bd. 4)1. Aufl. T. 1/T. 2. Stuttgart: Klett-Cotta, 1980.
4. Prominente ohne Maske NEU – 1000 Lebensläufe einflussreicher Zeitgenossen, München: FZ Verlag, 2001.
5. Scholtz, Harald: Erziehung und Unterricht unterm Hakenkreuz. (Kleine Vandenhoeck-Reihe, 1512), Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1985.
6. Schot, Bastiaan: Nation oder Staat? : Deutschland und der Minderheitenschutz : zur Völkerbundspolitik der Stresemann-Ära. Marburg/Lahn : J. G. Herder-Institut, 1988.
7. 『岩波西洋人名辞典』岩波書店，2013.
8. 梅根悟『近代国家と民衆教育――プロイセン民衆教育政策史――』誠文堂新光社，1967.
9. 大澤武男『ローマ教皇とナチス』文藝春秋，2004.
10. 小峰 総一郎『ポーランドの中の《ドイツ人》――第一次世界大戦後ポーランドにおけるドイツ系少数者教育――』学文社，2014.
11. 平井正『ヒトラー・ユーゲント : 青年運動から戦闘組織へ』中央公論新社，2001.
12. ベリング，R.（望田幸男・対馬達雄・黒田多美子訳）『歴史のなかの教師たち：ドイツ教員社会史』ミネルヴァ書房，1987.
13. 増渕幸男『ナチズムと教育 : ナチス教育政策の原風景』東信堂，2004.

URL:

http://de.metapedia.org/wiki/Kahle,_Maria　（最終閲覧：2014年 9 月）
http://de.wikipedia.org/wiki/Wolter_von_Plettenberg　（最終閲覧：2014年 9 月）
http://en.wikipedia.org/wiki/Wolter_von_Plettenberg　（最終閲覧：2014年 9 月）
http://www.jugend1918-1945.de/thema.aspx?s=5102&m=965&open=5102　（最終閲覧：2014年 9 月）
https://portal.dnb.de/opac.htm?method=showFullRecord&currentResultId=Maria+and+Kahle%26any&currentPosition=92　（最終閲覧2014年12月25日）

（2014. 12. 25）

（追記）

その後，民族政治科実習（Nationalpolitischer Lehrgang）について明らかになったことがある。それについては，のちの回で触れたいと思う。